

# モラエスがみた「鳴門の渦潮」—風景論の観点から—

宮崎 隆義

## 1. はじめに

本論の目的は、外国人が見た「鳴門の渦潮」について、特に徳島に 16 年間暮らして没したポルトガル人ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーザ・モラエス(Wenceslau José de Sousa Moraes, 1854-1929)を取り上げ、ひとりの外国人としてモラエスが、「鳴門の渦潮」を含む鳴門海峡周辺をどのような目で眺めたのかを検証する。日本人の心性を理解しようとしたモラエスのまなざしとその捉え方によって、「鳴門の渦潮」に対する広く日本人一般の心性とそれに基づく審美観を明らかにし、「鳴門の渦潮」がいかに顕著で普遍的な価値を持った、重要で日本的な景観の一部であることを明らかにする。

これまで「鳴門の渦潮」が、日本の四国徳島の鳴門を訪れた多くの外国人によって紹介されてきたばかりでなく、外国人観光客向けの主に英語によるパンフレットも作成されてきたことは本調査委員会の委員による調査研究報告でも明らかになっている。ただ、そこでは「鳴門の渦潮」が、「lion」という言葉で表されている「見世物」や「観光名所」というもの以上の、際立った精神性や普遍性を持ったものとみなされていることをうかがうことは難しいようである。それに対しモラエスというひとりのポルトガル人は、西欧の風景に対する審美観の歴史に立脚しながら、このように「lion」として外国人の目に留まった「鳴門の渦潮」を、風景としてのその精神性までを捉え、さらに日本人の心性に立脚した普遍性を持った風景、景観(1)として捉えようとしている。それが、モラエスや多くの外国人にとって理解されている、日本という国家の枠を超えた例外的な風景であり、ひいては人類全体の現代及び将来の世代に共通する、大切な文化的、自然的な重要性を持った風景であることを確認したい。

## 2. モラエス

1913 年 7 月 4 日、ひとりのポルトガル人が徳島に移り住んだ。その人物は、ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーザ・モラエスで、直前まで神戸でポルトガル領事館総領事をしてきた人物である。モラエスはポルトガルのリスボンで、官吏や軍人を輩出した家系に生まれ、長ずるにあたってポルトガル海軍の軍人となった。母親が文学的素養のある教養高い知的な女性であったこともあり、モラエスは、その傾向を受け継いでか、夢想的で多感

な少年時代を送り、家庭内で新聞を作ったり詩作にふけったりしたこともあった。海軍軍人の道を歩みながらも、文学好きなモラエスは文筆にも精力を傾け、海軍軍人として海外に赴きながら、通信員として本国ポルトガルに現地での見聞録を通信文として書き送ったが、それが本国ポルトガルでは高い評価を受け、後に『極東通信』や『日本通信』といった作品として結実した。やがて徳島に移り住むこととなり、徳島を舞台とした『徳島の盆踊り』や『おヨネとコハル』によって、当時の徳島をポルトガルに、さらにはヨーロッパに知らしめている。

海軍の軍人、士官として有能であったモラエスは、赴任した外地の様子を軍人としての目で正確に細かく眺めている。『極東通信』や『日本通信』、その他の作品にある記述を見る限り、地勢、天候、植生なども細かく記している。モラエスは博物学者、植物学者、数学者の面も備えていて、当時そうした面についても相当の評価を受けており、日本にやってくる前の赴任地マカオでは、リセの数学教授も務めている。ただそうした側面は、海軍軍人として必須の素養の延長でもあろうが、生来文学好き、芸術好きの詩人氣質であったことが、モラエスの審美観を醸成し、異文化への理解、特に日本の文化や事物についての深い理解に繋がっていたであろうことは推測できる。

モラエスは海軍軍人としての経歴を着実に積み、マカオに赴任した時には現地で亜珍(アチャン)と結婚してふたりの息子をもうけている。このマカオから、モラエスは武器購入を本国より命じられ、1889年に初めて日本に行くこととなる。それ以降、数回日本を訪れ、やがてモラエスは日本に定住する。神戸で領事館開設に奔走し、徳島出身の女性おヨネと知り合って生活を共にするが、おヨネは持病の心臓病で若くして亡くなる。それが一番大きなきっかけとなったといえるが、その後すぐに神戸での総領事を辞しポルトガル海軍の軍籍からも離脱すると、おヨネのふるさとであった徳島に向かうことを決心する。おヨネの墓が徳島に建立されたことも理由のひとつであるとされているが、モラエスは急速に西洋化の様相を呈する都会を離れて、古き良き日本の面影を残す地方都市徳島に移り住み、四軒長屋の一室で庶民の生活を自ら実践することで、日本人の生活に、ひいては日本人の精神生活に入り込み、その心性を探ることが目的だったろうと思われる。こうしてモラエスは本国ポルトガルの地を二度と踏むことはなかった。いかにも長屋の住人らしくつつましく貧しい生活を送りながらも、残された預金は現在の額で1億円以上、2億円近くもあったことが知られており、自由気ままな余生を好きなどころで優雅に送ることもできたはずだと、当時の人々は驚いたようである。しかしながら、もともとカトリックであったはずのモラエスは、日本の一地方都市徳島に骨を埋めるべく仏式の葬儀と埋葬を遺言として残していたが、それは、遡って初めて長崎に入港したときにモラエスが抱いていた思いでもあったようである。

ぼくはすばらしい国、日本にいる。ここ長崎で世界比類のないこれらの木々の陰で余生を送れたらと思う。(1889年8月13日、姉エミリア宛)(2)

このほぼ30年後にモラエスは徳島で亡くなっているが、実は徳島に移り住んだ直後に、日本語、ポルトガル語、英語で仏式の葬儀と埋葬を望む遺書を書いて、それを人目に触れぬよう壁に貼り付け、その上に風呂敷を覆っていたということが死後に発見されている(3)。モラエスの日本に対する思いがそれほど強く深いものであったことは、不思議ではあるけれども特筆すべきことであって、それ故に、異邦人であるモラエスのまなざしには、われわれ日本人が当たり前のこととして気づいていない普遍的なものを見出す鋭さがあったといつてよいだろう。

### 3. 日本への関心と憧れ、そして徳島へ

モラエスの日本への関心と憧憬は、西欧でのオリエンタリズムの隆盛と切り離して考えることはできないだろう。極東の日本への関心の高まりは、1851年イギリスのロンドンから始まった万国博覧会に、やがて日本からの物産が出品されたことが契機となったといつてよい。パリで開かれた1855年、1867年の万国博覧会では、日本からの物産や展示物によって、フランスにジャポニズムのブームが生まれたことは知られている。ちなみに、モラエスが心から敬愛し尊敬していたラフカディオ・ハーン(Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904)も、1884年にアメリカのニューオーリンズで開催された万国博覧会の会場で、日本から来ていた農商務省官僚の服部一三に展示物や日本文化を詳しく説明されたことが、後に日本にやってくることになった最初のきっかけともなっている。万国博覧会は、1851年にイギリスのロンドンで第1回が開かれたのを始まりとして今でも続いているが、その基本的な概念は、それぞれの国の歴史や文化に加えて、物産や特産品の紹介となっている。実は、モラエスも神戸時代に、1903年に大阪市天王寺今宮で開かれた第五回内国勸業博覧会にポルトガルの物産を展示することに奔走している。当時は内国勸業博覧会と呼ばれてはいたが、その博覧会は海外の国の展示も認めた、実質上今の万国博覧会と同じもので、この博覧会にモラエスは、ポルトガルの物産としてワインやコルクを展示したのであった(4)。

万国博覧会は、今のグローバリズムのうねりの契機のようなものだろうが、万国博覧会の会場に各国の物産品が並べられ、並行して歴史や固有の文化が示されるということは、それぞれの国の個性、国民性が示されるということ、いうなれば国の個性の発見ということでもあろう。同時に、過去から未来への展望に至る時系列に基づく展示は、チャールズ・ダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809-1882)の進化論の具現化でもあることが指摘され

ている(5)。『種の起源』(*The Origin of Species*, 1859)において表されたダーウィンの進化論の根底には、時間の流れというものに対する意識、過去の発見ということが存在しているといわれているが、その点では、極東の日本という固有の歴史と文化を持った国が、西洋と接触することによって個として発見されたということになり、さらに固有の時間の流れと独自の過去を発見認識されたということでもある。そしてそれはまた同時に、日本の個性が西洋に影響を受けて大きな変容を遂げてゆく、ある意味では進化してゆく契機となったということでもある。モラエスが指摘したように、「馬鹿げたものを盛んに産み出すことになるふたつの異文化の接触から結果する不調和」(6)として、当時、神戸や大阪、東京などの大都会でモラエスが目にしたのは、急速に西洋化を進め変貌してゆく日本の姿であり、また西洋に伍するべく軍備を増強拡大してゆく日本であったのである。

モラエスがそうした大都会に背を向けたのは、西洋風の建物が続々として姿を現す都会に嫌気を覚えたためであった。モラエスのその心性は、ヨーロッパの知識人たちの心性と共通している。つまりは、19世紀のロマン派詩人たちが代表する知識人たちが、進化発展してゆくヨーロッパの物質文明に対して疑問を抱き、ロマン主義として遠いものへのあこがれと過去の一体的な秩序の回復を求めようとした気風であって、東洋、そして極東の日本への関心とあこがれはその点でモラエスにも繋がっていたといってもよい。遠いものへのあこがれは、地理的には遠い異国や辺境の地、時間的には過去に向けられたのであった。そうしたモラエスの心性が、神戸や大阪、東京といった急速に西欧化する大都市に対して疑問と嫌悪感を抱かせることになり、その結果としてモラエスの目は大都市の周辺に向けられ、やがて徳島が、古き良き日本の姿を留めている一地方都市、日本の過去の姿を彷彿させるものとして選ばれたのである。

私のいる徳島は、大阪・神戸といった大都会からさほど遠くない四国の島の海岸の穏やかな町である。しかし、町の人たちは、すべての島国の人があたいいそうであるように、自分たちの風習に関してひどく保守的で、岩場の牡蠣のように伝統にしがみついている(7)。

いずれにしても徳島は、日本の、主として本州の他の地方都市と異なるような顕著な特徴をもたない地方都市である(8)。

この国に長く住んでいた私の知りあいのある人物—ちなみにオランダ人医師—が、ヨーロッパを広く旅したのちに数ヶ月前に戻ってきて神戸に到着した。その興味深い手紙の中で彼は、たいていの場合ヨーロッパ人が住んでいるいわゆる欧風建築の

バラック—他の言葉が見当たらない—と、たいていの場合日本人が住んでいる和風建築のバラックとが入りまじった、一貫性のない町全体のたたずまいについて、実に苦々しく語っている。彼が、医者がこんなことを私にむかって書くとは！・・・  
・私はそれらのバラックをよく知っている。神戸や横浜や長崎や日本の諸所にふんだんに見られるいわゆる欧風のそれらのバラックを。私もそれらには吐気をおぼえる。確言してもよいが、私の考えでは、この国で見受けられる不愉快でいらだたしいものの第一は、ヨーロッパ人居住者向けのそれらのバラックである。そのヨーロッパ人居住者に仕える召使の男女、家具やそれらのヨーロッパ人居住者に一般に供給されるその他の品物、そして・・・最後まで率直に言えば、数少ない例外を除くそれらヨーロッパ人居住者をも、その中に私は含めたい。

徳島にはこのようなものは何ひとつない。互いに相容れず、したがって、当然ながら馬鹿げたものを盛んに産み出すことになるふたつの異文化の接触から結果する不調和は何ひとつない。ヨーロッパ人がまだほとんどいない、西洋文化の波が非常にゆっくりとしか入ってこないここには、窓や西洋建築めいたその他のものを伴う建造物は滅多に見られない。市役所、裁判所、銀行などのような公私の大きな施設は、必要に応じてわずかばかり手を加えただけで、純粹日本建築の疑いなく気品高い外観を全体として保持している旧時代の古い家を利用している。

日本のこの地は、真の日本の国の姿を見せてくれる。これは徳島の美点のひとつである(9)。

モラエスにとって徳島を知るということは、日本の地方都市全般を知るということ、いふならば徳島がひとつの典型として日本の各地の地方都市と共有する普遍性を有しているということでもある。そしてそれは 21 世紀となった現代においても、徳島県外者からすれば、上の最初の引用にあるように、他の土地と同様、今でも変わることなく保守的な伝統や風習にしがみついている面があることを奇しくも突いているのである。

モラエスが夏の暑い 7 月 4 日、徳島の地に立ってその目に入った風景は、1889 年に初めて長崎に入港した時に見た長崎の風景と同様に、美しい魅惑に満ちた風景である。

夏の晴れた日の午後 — 正確に言うと、一九一三年七月四日の午後 — 船を下りて、私のために用意されていたごくささやかな住所に歩いて行ったときに受けた徳島の第一印象は、これ緑・・・という圧倒的な、だが快い印象であった！陶酔した瞳の中にどっと入り込む緑。ふるえる鼻孔にどっと流れこむ緑。緑、緑、緑一色！  
・・・何ひとつ考えることをゆるさない、まことに強烈な、排他的な印象。色

と香りによって生み出された陶酔感とでも言えよう(10)。

旅に疲れ、病気でいささか衰弱してゆっくりゆっくり歩いてゆく二軒屋の長い道沿いの左手に、家並を見下ろすように、一面草のビロードにおおわれた、松の影濃い美しい山がもったいぶった様子で聳えている。そして、その山と近くの田畑から繁茂する植物のいがらっぽいにおいが鋭く私の鼻をつく。創造者、変容者としての永遠の営みにいそしむ母なる自然から発散する生の神秘的発酵物の香気のように。緑、緑、緑一色！・・・(11)

激しく眩惑するかのように不意に襲ったこの緑の印象は、しかしながら先述のごとく、快いものであった、なぜなら、今思うに、私の弱り切った精神とは決定的に相容れないことがかねてよりはっきりしていた文明化された大都会での生活、偽りの外観で飾ったその洗練された生活の苦味とはまったく無縁の田園の簡素な風景を前にして、私は独立、自由、平安の無言の暗示によって純化されていたからである(12)。

モラエスは長崎港に入港した時の印象を次のように記している。

ぼくはすばらしい国、日本にいる。ここ長崎で世界比類のないこれらの木々の陰で余生を送れたらと思う。・・・だが、みごとな景色、ほほえみにみちた、神によって祝福されたこの土地をおもいを残して去るよ(13)。

初めて見た長崎の風景に対して、「すばらしい国、日本」、「世界比類のないこれらの木々の陰」、「みごとな景色」、「神によって祝福されたこの土地」として感嘆の声を上げたモラエスの感性は、24年後に見た「真の日本の国の姿を見せてくれる」(14) 徳島の風景に対するものと変わってはいないのである。

#### 4. 瀬戸内海の風景

長崎が、出島を中心として日本が世界との関りを持った唯一の町であったことなどはポルトガル人であるモラエスは当然知っていたであろうし、入り組んだ港の地形と迫る山地、坂の多い町の様子などは、神戸や徳島の様子とも似通っている。モラエスが見た長崎の港の風景は、それまでモラエスが陶器や漆器にあしらわれた絵、屏風の絵、書物を通して知り想像していたもののいわば確認であったろう。「世界比類のないこれらの木々の陰」が、具体的にモラエスが何で見たのか、あるいは読んだ書物のどこに記述されていたのか、

あるいはどのようにしてその印象を脳裏に作り上げたものかは不明だが、モラエスは日本に対して、特にその風景や景色に興味を抱いていたことがうかがえる。「みごとな景色」という言葉は、モラエスがそれまで見たり読んだりしたものが凝縮された言葉ともいえるだろう。

モラエスの乗った船が長崎に寄港したのが 1889 年ということを考えれば、モラエスの日本についての情報源というものをある程度は推測できる。だが残念ながら、モラエスは、徳島移住に際して蔵書をほとんど処分してしまった上に、神戸は空襲のために焼けモラエスの蔵書らしきものは残っていない。その上、徳島に持ってきた蔵書の類や、徳島で集めた書物の類は、モラエスが亡くなった時に遺言に従って当時の徳島県立光慶図書館に寄贈されたものの、これまた徳島の空襲で焼失している。現在、モラエスが亡くなった時の蔵書がどんなものであったかを知るには、『モラエス案内（増補再版）』（15）しかないが、その目録を見ると興味深い。

『モラエス案内（増補再版）』に収録されている「モラエス遺品と蔵書（焼失の分）光慶図書館、服部、多田両司書調査、但し昭和 20 年の空襲により全部焼失したるもの」（p.104）によれば、モラエスの蔵書は 1816 冊となっている。モラエスが日本に関心を抱いて、ポルトガル語、フランス語、英語で書かれた日本関係の書物を集めていたことを示しているが、この中に、日本の旅行案内として Chamberlain の *Handbook for Travellers in Japan* (1894) や *Things Japanese* 『日本の諸事』(1893)の他、Strang の *Hokusai* 『北斎』(1906)、『江戸名所百景』（広重画）、『北斎画苑』（北斎画、3 冊、天保 14 年）、『北斎漫画』（北斎画、15 冊、文化 11- 明治 11 年）、『東都にしき絵』（豊国、国貞画）、『暁斎画談』（河鍋暁斎（画）、4 冊、明治 20 年）などが含まれていて興味深い。モラエスはポルトガル海軍の軍人ではあったが、浮世絵などの芸術に対しても関心が強く造詣も深かったであろうことがモラエスの蔵書などからも裏付けとして推測できる。

日本においては、旅行者向けのハンドブックが 1881 年に *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* として横浜から出版され、2 版（1884 年）、3 版（*A Handbook for Travellers in Japan*, 1891 年）、4 版（同、1894 年）、以降、1917 年まで 9 版が出版され、最終的には当時の鉄道院から全 5 巻として出版されている。モラエスの蔵書にあるのは、Chamberlain の *Handbook for Travellers in Japan* (1894)なのでおそらくこの 4 版とみなしてよいだろうが、1894 年は、志賀重昂の『日本風景論』が出された年でもある。以降日本人にとって、風景というものが概念として定着してゆくこととなるが、その風景は、当然ながら日本人の審美観を反映したものであり、北斎や広重などが描いていた風景の発見もしくは定型化された風景の再発見であったと考えてよかろう。その後、1911 年には帝国議会に「国設大公園設置ニ関スル建議」、「国庫ノ補助ヲ仰キ日光山ヲ公園ト為スノ請願」

が提出され、1912年には、ジャパン・ツーリスト・ビューローが創立され、同年には大連、京城、台北に支部も開設されている。さらにその後、1927年には日本新八景の選定、国立公園協会設立、1928年に雑誌「国立公園」創刊（国立公園協会）、1930年に国際観光局の創設、1931年に国立公園法が制定されて、1934年に国立公園として雲仙、霧島、瀬戸内海、阿寒、大雪山、日光、中部山岳、阿蘇が指定されている。1936年にはさらに国立公園として十和田、富士箱根、吉野熊野、大山が指定されている(16)。

モラエスは1889年8月4日に初めてやって来て見た長崎の港の風景に感嘆したが、その後船で瀬戸内海を通過して神戸に立ち寄り、さらに8月25日横浜に至るまでに見た風景は、彼が陶器や漆器の絵柄や屏風に描かれた風景、読んだ書物から頭の中に作り上げていた想像の風景であったはずであり、自分の目で実際の風景を見ることが「この世にありえないものが現実に入りうるものになっている」ことの、いわば確認であったともいえる。

瀬戸内海、インランド・シイ、これだけで、充分、日の出の帝国を定義できるだろう。船が本州、九州、四国の島々を縫って進むとき、海水を浴びている無数の小島が散在するので、少しも陸地を見失わないで、しょっちゅう沿岸のなごき近くを航行することになる。あおあおした島々の風景、バラ色の風景、火の色の風景、そのうえ、驚くほど密集している杉の緑の茂み、鏡のような海面からぼっかり浮かんでいる気まぐれで小さい岩山、きものを着て道路を横切ったり畑を耕している男女、ヨーロッパに輸出する陶器や屏風や漆器の空想的題材になっている光と姿に包まれた全景、それらがすべて、つぎつぎにこの商船が進んでいく海上に姿を現してくる。これこそ、日本である。日本には荘厳な風景はないし、豪壮さもない。ここにあるのは、こまごました背景、驚嘆すべき細心な天然の配慮がはてしなくつづいて、神秘的空想の国、幻想の国にしている風景の配列の妙である。この国は、母である土地を離れて他の天体の秘境にはいったような気がして、この世にありえないものが現実に入りうるものになっている。(17)

雲仙、霧島と瀬戸内海が国立公園として指定されたのが上述のように1934年なので、モラエスはもう既に亡くなってはいるが、モラエスの目が捉えた長崎周辺や瀬戸内海の風景は、上の文章からうかがえるように国立公園たるべき風景であることが十分に理解できる。「ヨーロッパに輸出する陶器や屏風や漆器の空想的題材になっている光と姿に包まれた全景」は、モラエスがポルトガルで、あるいは日本にやってくる以前の世界各地で目にしたと思われる描かれた風景であり、日本の職人たちが、当時の日本の国策に従いヨーロ



ッパに向けて日本固有の風景として陶器や屏風に描いたもののまさに実体としての風景、全景、パノラマであり、「この世にありえないものが現実によりうるものになっている」のである。瀬戸内海国立公園は、その後その範囲が拡大され、1927年の「日本新八景」、「日本二十五勝」さらに「日本百景」に至ってやがて「鳴門の渦潮」を擁する鳴門海峡周辺も含まれるようになったが、基本的には鳴門海峡も「ヨーロッパに輸出する陶器や屏風や漆器の空想的題材になっている光と姿に包まれた全景」の一部として「こまごました背景、驚嘆すべき細心な天然の配慮がはてしなくつづいて、神秘的な空想の国、幻想の国にしている風景の配列の妙」を感じさせる風景であると考えてよかろう。モラエスの目が捉えていた風景は、江戸時代後期の絵師たちが真景図として描いていた風景を、やがて日本人が風景の概念を意識し普遍性を帯びた日本固有の風景、景観として捉えるようになったものなのであって、当然ながら「鳴門の渦潮」を含む鳴門海峡の風景もその普遍性を備えたものであるとあってよい。

上の文章には、モラエスが長崎から瀬戸内海を通り神戸に至る船上から眺めた瀬戸内海の風景が見事に活写されているが、実はその文章には、西欧での風景の発見とその概念、その歴史がさりげなく埋め込まれている。ヨーロッパにおいて田園や自然の風景に美を見出したのは、風景画が登場した17世紀のことであり(18)、モラエスが「荘厳な風景」や「豪壮さ」として言及しているものは、おそらく「崇高美」を美学上の概念として捉えるようになった18世紀のエドモンド・バーク(Edmund Burke, 1729-1797)の『崇高と美の観念の起源』(*A Philosophical Inquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*, 1757年)以降に関わるヨーロッパの人々の美意識が根底にあると思われる。そうした「荘厳な風景」や「豪壮さ」を帯びた風景に対して、瀬戸内海に見えるのは、「こまごました背景、驚嘆すべき細心な天然の配慮がはてしなくつづいて、神秘的な空想の国、幻想の国にしている風景」であり、その「配列の妙」なのである。モラエスが瀬戸内海の風景を見て感じたものは、実は、初めて長崎の風景を目にした時と同じであり、後に徳島にやっ来て見た徳島の風景、さらには、鳴門海峡の風景を目にした時ともさほど変わってはいないのである。

## 5. 徳島の風景

モラエスは、神戸での総領事を辞し、ポルトガル海軍の軍籍を離脱してまで徳島にやっ来て来たが、この時の彼はあたかも日本の平安時代から鎌倉時代にかけての鴨長明と同じ心境で徳島を眺めている、あるいは眺めようとしたといえる。「零の免状」ということをモラエスは『徳島の盆踊り』の中で、隠遁生活を送った鴨長明に関わり強調するように述べているが(19)、身分や地位、財産、名誉などあらゆるものを捨て去った「零」の状態で

あるがゆえに、偏ることのないまなざしであらゆるものを眺めることができるというのである。そうした境地に立ち、神戸や大阪のような、西欧風の建物が立ち並んで急速に欧風化されていく大都会よりも、古き日本の姿を留めている地方都市を眺めることによって、日本の本質、日本人の心性を捉えようとしたのであろう。ポルトガル海軍軍人として、後には外交官、領事、総領事としての職についたモラエスは、職務上、極東や日本の状況をつぶさに把握観察しあらゆる情報を収集して分析しながらも、同時にそこに住む人間たちの心性を探ろうとしている。それが『極東遊記』や『日本通信』などに形として結実したのであろうし、『徳島の盆踊り』、『おヨネとコハル』、さらには集大成としての『日本精神』などは、まさにモラエスが「零」のまなざし、心眼で眺めた日本人の心性のあり方であったともいえる。その点で、モラエスが神戸を離れようとした時に、古き日本の姿が残る松江や徳島を候補地として考えたのも頷けるのである。

いずれにしても徳島は、日本の、主として本州の他の地方都市と異なるような顕著な特徴をもたない地方都市である(20)。

モラエスは、おヨネの生まれ故郷で、おヨネの墓が建立された徳島にやって来ながら、『徳島の盆踊り』ではおヨネのことに直接詳しく触れることはなく、表面的には私情に囚われずに偏ることのないまなざしで、徳島が「本州の他の地方都市と大きく異なるような顕著な特徴を持たない地方都市」として眺めることに徹している。そしてその地方都市である徳島において、実際に四軒長屋の一室を借り長屋住まいをしながら一庶民としての生活を実践することによって、鴨長明しながらに文筆に没頭するのであるが、ポルトガルの読者は、モラエスの書いた文章から徳島を典型とする日本の地方都市の普遍的なイメージを思い浮かべたことであろう。さらにはポルトガルを通してヨーロッパの人々が、「岩場の牡蠣のように伝統にしがみついている」古き良き日本についてのイメージを形成するに至ったことであろう。おそらくモラエスが『徳島の盆踊り』に込めた意図は、「徳島」という具体的な地方都市を取り上げ、そこに庶民として実際に住み暮らすことによって、日本の、急速に欧風化されつつある大都市ではない古き良き地方都市を描き出して、日本の個性として、固有の歴史と過去を持った日本の、例外的で普遍的な古き良き姿を紹介することであつたろうと思われる。

徳島にやって来た時の第一印象が「これ緑」、「緑一色」というものであったが、この印象は、モラエスが日本に初めてやって来る前に、陶器や漆器に描かれた絵、屏風の絵や、書物から得ていた日本に対する印象、そして長崎の風景を見た時と大きく変わるものではなかったようである。

夏の晴れた日の午後 — 正確に言うと、一九一三年七月四日の午後 — 船を下りて、私のために用意されていたごくささやかな住所に歩いて行ったときに受けた徳島の第一印象は、これ緑・・・・という圧倒的な、だが快い印象であった！ 陶酔した瞳の中にどっと入り込む緑。ふるえる鼻孔にどっと流れこむ緑。緑、緑、緑一色！・・・何ひとつ考えることをゆるさない、まことに強烈な、排他的な印象。色と香りによって生み出された陶酔感とでも言えよう(21)。

旅に疲れ、病気でいささか衰弱してゆっくりゆっくり歩いてゆく二軒屋の長い道沿いの左手に、家並を見下ろすように、一面草のビロードにおおわれた、松の影濃い美しい山がもったいぶった様子で聳えている。そして、その山と近くの田畑から繁茂する植物のいがらっぽいにおいが鋭く私の鼻をつく。創造者、変容者としての永遠の営みにいそしむ母なる自然から発散する生の神秘的発酵物の香気のように。緑、緑、緑一色！・・・(22)

激しく眩惑するかのように不意に襲ったこの緑の印象は、しかしながら先述のごとく、快いものであった、なぜなら、今思うに、私の弱り切った精神とは決定的に相容れないことがかねてよりはっきりしていた文明化された大都會での生活、偽りの外観で飾ったその洗練された生活の苦味とはまったく無縁の田園の簡素な風景を前にして、私は独立、自由、平安の無言の暗示によって純化されていたからである(23)。

モラエスが徳島にやってきたのが7月4日であるが、その頃の徳島の暑さは今と同様にひどいもので、上記の引用からうかがえる、視覚や嗅覚など、五感を駆使した描写によるまるで初夏のような清々しいイメージからはどうも少しかけ離れている(24)。ここに描かれているのは、緑の木々で覆われた、島嶼国日本の原型的なイメージで、長崎の風景、瀬戸内海で見た風景と変わりなく、ピエール・ロチ(Pierre Loti, 1850-1923)やラフカディオ・ハーンなど、あるいは彼ら以前のモラエスの先人たちがそれぞれその文章で、言葉の世界で作り出されたイメージでもあったろう。

モラエスが、海軍の軍籍を捨て、総領事を辞して徳島にやってきたとき、先に述べた鴨長明のように、彼のまなざしと意識は、ひとりの平凡な市民、庶民のものであった、あるいはそれに近いものを持つとしたと言ってよい。神戸は、急速に西洋化され、また、ヨーロッパ各国の領事館や大使館が肩を寄せ合うように立ち並んで、その名残が神戸三宮あたりの今の異人館の町並みとして残っている。モラエスの領事館兼住まいもそのあたりの現中央区山本通三丁目にあったが、二階で和服姿のモラエスが友人のペドロ・ビンセン

テ・デ・コウトと一緒に写っているその建物は、モラエスの好みや気持ちを反映してか、伝統的な日本家屋である(25)。日本でありながら、ヨーロッパの建物そのままの建物が立ち並んだそのあたりの町並みは、モラエスの目には偽りの外観で飾ったもの、バラックとしてしか映らなかったのであろう。モラエスは、ポルトガル海軍軍人であり、外交官であり、そして領事であった人物であるが、日本についての情報を集めるだけに終始した人物ではなかったようである。ピエール・ロチやラフカディオ・ハーンに影響され、日本に対する憧れを持つに至ったモラエスは、彼らの作品の中に描かれた古き良き日本の姿を見出して確認しようとしたと言ってもよい。

知らない者は大尉が言ったことをほんとうにするかもしれない。とにかく、文書で書いてあったり、ヨーロッパにまで渡来している陶器や屏風の時代錯誤の図柄で見たりで、珍奇に、ふつう空想化されている日本、幻想的な風景の国、さくらの国、美人の国、軽はずみな恋の国といったような国は、世界主義が独特の性質を剥奪してしまっている大商業都市の神戸、横浜や外交の中心地、東京でさえいまではなくなってしまうているが、人口のあまり多くない生粋に日本的なこの長崎では、まだ残存している。自然の景勝がそうした日本的な魅力を身につけて、重畳とした杉林の山なみに狭ばまった港湾は、旅行者の目をうばう最も美しい景色のひとつでもある。(26)

日本がヨーロッパに伝えられたとき、その日本は、モラエスが述べているように幾分か「時代錯誤」的であったろう。だが、それは 21 世紀となった現在でもさほど変わってはおらず、いまだに日本のイメージ、その姿というものは、富士山（フジヤマ）、芸者（ゲイシャ）の世界、あるいは浮世絵の広重（ヒロシゲ）や歌麿（ウタマロ）の世界であって、パリ万国博覧会で知られることになった古き日本、あるいは江戸情緒の漂う日本なのであろう。現代の日本を訪れる観光客も、実は、その古き日本の姿、あるいはその面影を求めてやって来ているのである。考えてみれば、われわれが日本各地、あるいは世界各地の事物や風景を眺めて感嘆するのは、写真や映像で見たものや書物を通して抱いたイメージを、直接に本物として眺め確認していることの感慨でもある。

モラエスは、『徳島の盆踊り』において、徳島の概観として、海軍軍人としての目でその地形や地勢、町の概観を正確に捉えている。神戸から船によって徳島に着いた時、徳島の様子を次のように記している。

私たちは徳島に着く。

小さな川の支流、というよりも運河が形づくる絵のように美しい港は、神戸、大阪を含む近隣の港に毎日通う小蒸気船でにぎわっている(27)。

Chegamos a Tokushima.

No porto, pittoresco, formado por um pequeno braço de rio, ou antes de canal, animação de barquinhos de vapor, empregados nas carreiras diárias com os portos vizinhos, incluindo Kobe e Osaka(28).

モラエスは、ここで、徳島の港について「絵のように美しい」と形容しているが、「絵のように美しい」(pittoresco)風景もまた、17世紀以降ヨーロッパで発見された風景、ピクチャレスク(picturesque)な風景でもある(29)。その風景に対し、モラエスの見方では、西洋化、欧風化している大都市は虚飾の都市ということになり、「馬鹿げたものを盛んに産み出すことになるふたつの異文化の接触から結果する不調和」としての「バラック」が立ち並ぶ大都市の町並みは、モラエスの目には不快極まるものと映っていたのである。

大都市に西洋風の「バラック」が立ち並び始めている日本に「真の日本の国の姿」を見出すためには、モラエスがいた時代では、彼が決心したように、地方都市に行くことがひとつの方法であったろうし、今でもそれは観光としてあまり変わるまい。徳島移住の決心は、おヨネの墓が建立されたことがあっただけでなく、「真の日本の国の姿」を探し求めてのことであったに違いないと述べたが、モラエスが、当時流行していた絵葉書をしきりに買い求め、ほとんど毎日のように姉や妹に、さらに知人たちに書き送ったのは、絵葉書が、古き日本の姿を写し留めていたこともあったろうと思われる。

絵葉書が日本国内で広く使われ始めたのは1900(明治33)年のことで、日露戦争に際して逓信省から発行された「日露戦捷絵葉書」の大流行が、その後の絵葉書のブームのきっかけとなっている(30)。絵葉書は、江戸時代の絵図や浮世絵の性格を持ちつつ、事件や災害のニュースの性格も持っていたようで、いわば今のメディアに相当するものと考えてよいであろう。神戸にいた頃のモラエスは、日本各地の絵葉書を購入しポルトガルに書き送っているが、現存しているモラエスの絵葉書書簡を眺めれば、あらゆるものが網羅されていることがわかる。日本各地の観光名所のものや、神社仏閣、街並みやそこに住む人々、風物、災害の様子、四季折々のもの、干支、さらには天皇の絵葉書にいたるまで、モラエスは、実にこまごまと収集家のように買い求めて短信として家族や知己に送っていたのである。考えてみれば、世界中のどこであれ、その土地の映像が簡単に得られる現在の状況と比べ、当時は、手紙や葉書、もしくは先人たちの書き残した書物に書き連ねられた言葉を通して、想像力を働かせることによってしか知ることはできなかったのである。その点

で、絵葉書は視覚的な情報として非常に有効なものであったろう。

写真が発明されるまでは絵によってであったが、写真が普及するにつれて絵葉書の絵は写真に置き換わってゆく。モラエスが、日本の事情を外交官としてあるいは軍人としてポルトガルに伝えるには絵葉書の絵や写真は、実に具体的で密度の濃い情報であったろう。それ故に、絵葉書を毎日のように書き送っていたモラエスが、独探、ドイツのスパイとの疑いをかけられてしまったのもあながち的外れでもなかったといえる(31)。

写真が登場したのは 19 世紀中葉で(32)、それまでは絵画やスケッチであった。19 世紀には家族の肖像写真がブームとして起こるが、それは時間に関心を持ち、過去と未来を意識し始めた、ダーウィンの進化論が登場した 19 世紀という時代から生まれたものであり、写真はその時の時間、瞬間を停止させ、その時を未来へと永遠化することに他ならない。絵画としての肖像も、年老いてゆく人間の、ある一時期を捉え停止させるものであったのである。写真の技術が登場し普及し始めると、肖像画に代わって人物写真や家族写真が流行する。いずれにしても、時、瞬間を停止させ留めることである(33)。写真の技術が進歩するにつれて、およそ人の目に入るあらゆるものが記録のように撮影されることとなるが、特に風景については、初期の写真は絵画から構図を借りてピクチャレスク、つまり「絵のように美しい」風景を現実の風景から切り取り写し取ったようである(34)。

モラエスが集めた絵葉書は膨大な数に上る。徳島にあるモラエス館に所蔵のものは、609 通で、その他にも京都外国語大学に絵葉書が所蔵されている。また、リスボン在住の故マルティンス在日ポルトガル大使の夫人であったイングリッド夫人の許には、100 枚前後の絵葉書が未整理の状態であるとのことである(35)。すべてを網羅することは不可能であるが、岡村多希子氏が邦訳した『モラエスの絵葉書書簡集』、さらにポルトガルのオリエンテ財団から 2004 年に出版されたモラエスの絵葉書書簡集『モラエスの日本での滞在と放浪』(36)を見ると、モラエスが買い集めて書き送った絵葉書の概要を知ることができる。絵葉書と、その裏面に書かれた文面とはほとんど関係がないことは『モラエス絵葉書書簡集』でもうかがえるが、モラエスが買い集めていた絵葉書は、日本各地の名所の風景物が多い。名所の絵葉書は、写真が登場する以前から絵で描かれていたもの、いわば真景図が写真化されたものとなっている。葛飾北斎の『富嶽三十六景』、歌川広重の『東海道五十三次』や『名所江戸百景』の浮世絵版画など、各地の名所図会は、まさにピクチャレスクなもの、「絵のように美しい」ものとして定型化された風景でもあり、そのような風景や類似の風景が、各地で実写の風景写真として絵葉書となっているのである。

モラエスが書き送った徳島県内の風景や風物を扱った絵葉書の多くは、県内の書店や商店から発行されていて、徳島市内の各地のものや郊外の藤井寺あたり、小松島や鳴門、さらに池田や祖谷などのものが中心であり、徳島でも当時絵葉書が大きなブームであったこ

とが察せられる(37)。この頃の風景の絵葉書は、名所案内の傾向が強いが、その名所は大まかに言えば日本的な風景ということになる。徳島市の南に隣接する小松島市の小松島海岸の風景などは典型的な白砂青松の風景画、あるいは図会がそのまま写真となった印象で、遠近法や構図、視点などが似ている。風景ばかりでなく、徳島市内や近郊の名所、眉山中腹の神武天皇像や明治天皇像の写真、大滝山三重塔の写真、徳島中央公園あたりの写真なども典型的な観光写真であって、今日でも目にするものと大差はないといってよい。こうした写真は、モラエスにとっては「真の日本の国の姿」を垣間見せるものであり、モラエスが先人たちの文章から想像を働かせて見ていたもの、いわば心眼で見ていた風景に近いものであったろうと考えられる。

## 6. 鳴門海峡と「鳴門の渦潮」

モラエスは、徳島在住の間、2回ほど「鳴門の渦潮」の見物に出かけている。1回目は徳島にやって来て2年後の1915年6月のことで、『徳島の盆踊り』には撫養航路の描写、鳴門の展望台での鳴門海峡の描写、渦潮の描写として記述されている。モラエスは、徳島市のほぼ中央、市内を流れている新町川の両国橋から鳴門に至る撫養航路と呼ばれるルートを利用し大変な旅をして鳴門に到着し、その後人力車に乗って展望台に向かいそこからの風景を見ている。撫養航路自体は明治25年から徳島鳴門間を結ぶ重要な交通運輸の役割を果たしてきたが、昭和10年に当時国鉄の高徳線が全線開通し、衰退廃止の経過をたどった。現在では、「新町川を守る会」によって撫養航路の船旅を楽しむことができる。この撫養航路を利用して鳴門についてのモラエスは、鳴門海峡を目の前にして「その風景は、画家の絵筆が絹布の上の意匠に、陶器に、漆器に好んで写し取る自然の美の極致に達した、みごとに日本的な風景である」と書いているのである。

一九一五年六月一二日

やっと撫養に着き、四国の島を淡路島から分かち、その壮大な風景で名高い海峡である鳴門を見物に行く。撫養から鳴門のあたりまでは、男が引っぱる日本の車である（注：「くるま」〔人力車〕）で1時間の道のりである。丹精こめて耕作された沃野に沿って行く。すると、木々で美しくおおわれた小山が現われる。人々は「くるま」を降りてジグザグの小道を登る。小山の頂きから不意に眺望がひらける。紺青の水をたたえた海、岩礁で砕けた波がつくるまっ白な泡がひと筋そこを走る。眼前に淡路の島がくっきりと浮かぶ。さらに松の生えている二、三の小島。つらい旅をした甲斐があった。

私たちは鳴門海峡を前にしている。その風景は、画家の絵筆が絹布の上の意匠に、

陶器に、漆器に好んで写し取る自然の美の極致に達した、みごとに日本的な風景である(38)。

Chega-se finalmente a Muya para ir vêr o Narutó, o canal que separa a ilha de Shikoku da ilha de Awaji e é famoso pelo seu magnifico scenario. De Muya até attingir as alturas de Narutó, é uma hora de caminho em kuruma, o carrinho japonex puxado por um homem; seguindo ao longo de campos férteis, cuidado samente cultivados. Depois, surge-nos um co moro gentilmente coberto de arvoredos. Apeia-sea gente do kuruma, galga por um trilho em zigue-zague. Do alto do cótnoro, rasga-se de surpresa o horisonte; é o mar, de águas de um bello azul, sulcado por um veio de alva espuma, proveniente das ondas que se quebram nos re cifes. Em frente dos olhos, contorna-se a ilha de Awji, surgindo ainda uns dois ou três ilhéus, arborisados de pinheiros. Valeu bem a pena a caminhada. Estamos em presença do canal de Narutó; a scena é deliciosamente japoneza com este requinte de graciosidade natural que os pincéis dos artistas se comprazem em imitar, já nos desenhos sobre seda, já nas porcelanas, já nos charões(39).

モラエスのこの記述は、長崎の風景を初めて見た時、そして長崎から瀬戸内海を通じて神戸に至る途中に見た瀬戸内海の風景、徳島の地に立って見た徳島の風景についての記述とさほど変わってはいない。モラエスの目には、鳴門の風景が、モラエスの心眼で見た「画家の絵筆が絹布の上の意匠に、陶器に、漆器に好んで写し取る自然の美の極致に達した、みごとに日本的な風景」と重なり合っているのである。この描写にぴったりと一致するような、鳴門海峡を直接に示す具体的な絵葉書は残念ながら見つからなかったが、ポルトガルのオリエンテ財団が 2004 年に『モラエスの日本における滞在と放浪』というタイトルで絵葉書集を出しており、この中には鳴門市の撫養の風景である「堀越ノ激流」といった絵葉書（下左、図 1）が含まれている。



図 1



図 2



上右の図2も鳴門市の「撫養岡崎港」の風景であるが、ともに写真としての構図を考えてみると、絵画的で興味深いものである。水平線が画面上下の中央よりわずかに上に写し込まれているために、手前の前景が強調され動的な印象を与えていると同時に、遠近感が効果的に生まれて立体感を伴っているのである。おそらく名所図会としても通用する構図であろうし、本調査委員会でも紹介されている鈴木芙蓉や森住貫魚、歌川広重などの真景図ともあまり変わらない印象を受ける。

下の図3は「淡路鳴」であるが、特にその構図や、小舟に乗って櫓を操る人、小島と松の風情、海の様子など典型的な日本の風景とってよく、さらに当時流行した、白黒写真に彩色することによってまるで江戸時代の浮世絵版画を連想させるものとなっているのである。

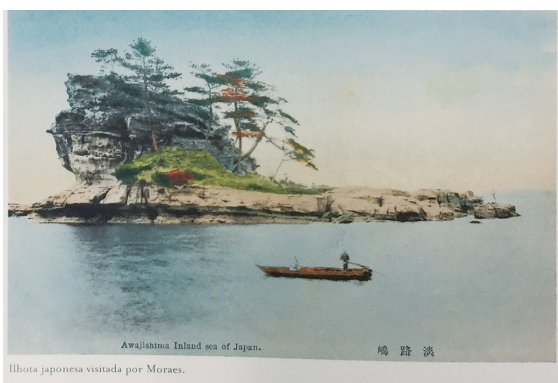


図 3

こうした絵葉書は、モラエスばかりでなく、当時の外国人、今の外国人にとっても、古き日本の美しい風景を伝えるものであろうと思われる。

また、岡村多希子氏の『モラエスの絵葉書書簡』には、「鳴門之全景（其一）」（図4）と「鳴門之全景（其二）」（図6）という絵はがきが文面とともに紹介されている。文面（図5）には「この風景は、徳島がある阿波の国のもっとも有名なパノラマ〔鳴門〕をあらわす二枚組のうちの最初の葉書だ」とあり、「昔行ったことがある」と書かれている。



図 4

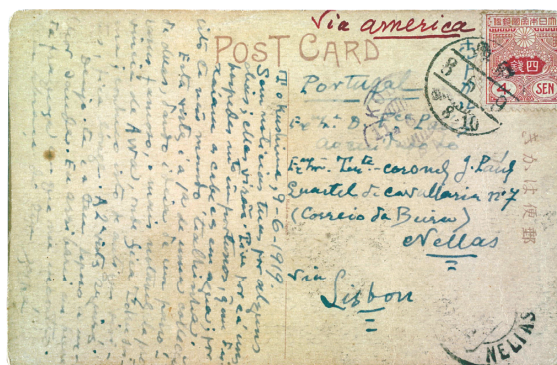


図 5

1919年6月9日

数日お前の便りが無い。だが、来るだろう。こちらにとっても嫌な泊り客が数人来ていて、うんざりさせられた。そのため手拭は送らない。

この風景は、徳島がある阿波の国のもっとも有名なパノラマ〔鳴門〕をあらわす二枚組のうちの最初の葉書だ。ぼくは、昔行ったことがあるのでここを知っている。遠くだ。二枚目はあとから送る。

お前と夫君に最高の健康を祈る。ぼくは、今のところ弱っているが、じきに快くなるだろう。さようなら

「鳴門之全景（其二）」（図6）の葉書の文面（図7）は風景とあまり関係の無い内容になっている。

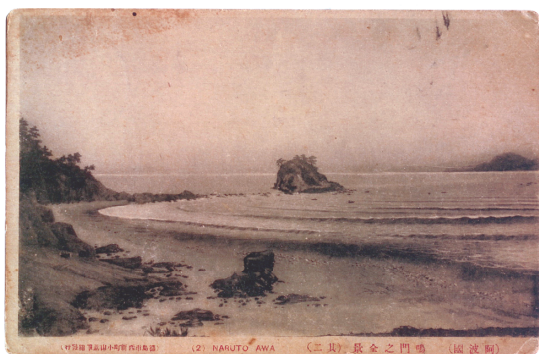


図6

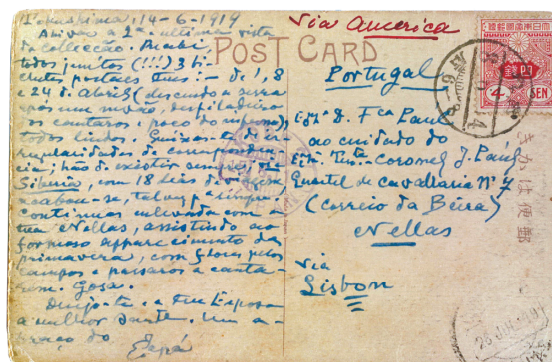


図7

1919年6月14日

シリーズの最後の二枚目が行くよ。4月1日、8日、24日付の3通の葉書（吹雪のあとの山を下ると、一列に並んだ壺と、地獄の池）を全部いっしょに落手した。どれも美しい。お前は便りが不規則だと嘆いている。シベリア経由はいつもの通り存在するであろうが、18日で着くということはおそらく永遠になくなってしまった。

お前は相変わらずネラスに魅了され、野に花が咲き小鳥が歌う春の美しい出現を見守っている。たのしむがいいよ。

お前と夫君の最高の健康を祈る。さようなら

上に紹介した両方の絵葉書は似通ったものとなっているが、水平線の位置による遠近感の妙、かすんだ遠景と前景に配置された白波が寄せる海、小島と陸とのバランスなど、浮世絵版画の名所図会のような構図と印象を伝えている。

次の絵葉書（図 8）も、偶然同書に見つけたものであるが、「徳島に於ける鳴門の舞」と記されており、鳴門海峡を背景としての舞の様子が、地元の人々か観光客を手前にしてあたたかも記念写真のように写し取られている。この葉書の文面（図 9）も、特に絵葉書の風景とは関係ないものとなっている。



図 8



図 9

1913 年 10 月 23 日

変わったことは何もないよ、シカ【妹フランシスカのこと】。今はいい気候だ、涼しくて。

ぼくは健康状態がよく、変わりなく、庭の手入れやその他のことをたのしんでいる。今はあまり出歩かないで、読書をよくしている。これで暇がまぎれるし、身体にもよい。ゼ【妹の夫、ジョゼのこと】によろしく。さようなら。

アパ【モラエス自身の子供の頃の愛称】

着物を着た少女たちの舞の様子など、松林の背景とわずかに見える遠景、垂れ下がる松らしき枝を取り入れたこの絵葉書もまた浮世絵版画的であるし、古き日本の姿、伝統芸能というものによる日本固有の過去の発見と認識という印象を伝えるものとなっている。

モラエスの 2 回目の鳴門訪問は 1924 年、モラエスが 70 歳の誕生日とされており、林久治氏がインターネット上にも掲載しているが(40)、その典拠は佃實夫の『わがモラエス伝』である。それによれば、モラエスが 70 歳の誕生日に、「鳴門の渦潮」を見に行ったということが書かれており、その時に見た渦潮の様子について「海面の高さが内海と外洋とで 2 m 近い落差を生じ、逆巻きながら滝状の奔流となる」と述べられている。

本 II（注、佃實夫『わがモラエス伝』）(p.231-245)によれば、モラエスは 1924 年 5 月 30 日の 70 歳の誕生日に鳴門に再度行っている。この時には、徳島から撫養へは川

の連絡船と阿波電気軌道の鉄道を利用している。この鳴門見物には、隣人の小出治郎が同行している。モラエスが 1929 年に 75 歳で亡くなった 5 年後に、小出は「モ翁の思い出」と題する談話を徳島の新聞に掲載している。

佃が本 II を書いた際には、小出に面会してモラエスとの交際内容を詳しく取材している。小出は 30 少し前の青年で市役所に勤めていた。彼はモラエスの数少ない親友の一人であった。来客ぎらいのモラエスの性格を飲み込んでいた小出は、モラエスを訪ねてくることはなかった。ただ、モラエスが年に一度か二度、県内の小旅行をする時に、小出に道案内を頼んだり、旅行の予備知識をうるために説明を求めたりしていた。小出は中学中退で、中学三年でいどの英語力があつた。日本語ばかりのカタコト会話とちがって、英語まじりの小出との会話はモラエスの役に立った。

モラエスは 70 歳の誕生日を意義深く送りたいと思っていた。彼は当時の日本人は誕生祝いをしないことを知っていたので、小出には当日が誕生日であることを告げなかつた。当日は雨だったので、モラエスは少しがっかりした。しかし、彼は雨の日に鳴門に行って、本 IV（注、『徳島の盆踊り』）で書いた鳴門の印象を訂正しなければならぬと思った。同行した小出は、その時のモラエスの様子を、佃に次のように語つた。

「モラエス翁は、長い間立ち尽くし、まるで、雨が降っていることを忘れていたようでした。不思議なような景色を観ました、と傍にいる私に感動の声で言ったものでした。不思議だ、不思議だ、と翁は数回繰り返して呟き、あかず渦に見入っていたものです。少年のころから私は何度も鳴門へは行っているのですが、あの時の渦ほどすばらしい渦は、あとにも先にも見たことがありません。」

（中略）

幸運にも、モラエスは大潮時に鳴門の渦潮を目撃したのであろう。本 II によれば、モラエスはポルトガルの友人（注、ベント・カルケージャ）に次のような手紙を書いている。（『 』内の部分）

『あいにくの雨だったけれど、雨ゆえに新緑の美しい鳴門の丘を、再びぼくは登った。おそらくぼくは、このあと、何度も徳島の田舎をおもいのままに歩き回ることにはあるまい。したがって、いやそうでなくたって、雨にけぶっていた満目緑また緑の、あの美しさ！ぐっと吸い込んだ緑、あの微醺！緑、緑、緑！そして眼下に展開した海峡と潮流がつくりだした景観！君、想像できるかい、海面の高さが内海と外洋とで 2 m 近い落差を生じ、狂おしく逆巻きながら滝状の奔流となる光景を！

渦はこの瞬間にできる。海原に轟く音 —。それも水面の落差が生む。何しろ君、潮は 1 秒間に 7 m の早さの激流と化しているのだ。私を案内してくれた若者の説明

によると、最も巨大な渦だと、その直径が約 30 mにもなるという。だが、これは、観潮に最もふさわしい春の〈大潮〉や秋季の〈大潮〉の時期の話だ。残念ながら若くは、5月30日の誕生日を記念して散策したので、それほど巨大な渦を期待すべくもなかったのだ。でも、とてもすばらしかった。』 (41)

「鳴門の渦潮」に関するモラエスの記述というのはこれくらいに過ぎないが、モラエスが、「鳴門の渦潮」を含む鳴門の風景を「自然の美の極致」、「見事に日本的な風景」であると書いていることは、「鳴門の渦潮」に対する日本人の捉え方の核心を突いているものと考えてよいだろう。モラエスのそうした記述からうかがえるのは、彼が、長崎に到着して見た長崎の風景、瀬戸内海の風景、徳島にやってきたときの徳島の風景と同様に、日本に固有の普遍的な美として捉えていることである。モラエスの死後、国立公園として長崎の雲仙やその周辺、瀬戸内海が指定され、後に鳴門海峡周辺もその中に含まれているが、日本的な風景に対するモラエスの目の確かさは否定できないであろう。そこには、モラエスが理解しようとした日本人の心性というのが反映されていることも、モラエスのその生涯とその心的な傾向を鑑みれば理解できるのである。本調査委員会の他の委員の調査資料にも触れられていることであるが、徳島県に関わる鈴木芙蓉や守住貫魚などが描いた真景図も定型化された風景として日本の風景の普遍性を示していると考えてよい。モラエスと生年が同じイギリスのオスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)は、「自然が芸術を模倣する」(‘Nature imitates Art’, *The Decay of Lying*, 1891)という逆説の言葉を残しているが、相互に直接の関わりはなくともそれぞれ同時代に生きた人間として、何がしか共通の審美観を持っていた感がある。われわれがある風景を見る時には、絵画や写真、絵葉書やテレビの映像などで見た風景を再確認しているところがある。それが定型化された風景というものであり、それを美しいと思うのはわれわれ日本人の心性ということになるであろうし、自然の風景が切り取られて一幅の芸術作品として現れてくるのである。

モラエスが述べたとされる言葉で、「眼下に展開した海峡と潮流がつくりだした景観」には、静的な風景に対する動的な潮流、そしてそれが作り出す「滝状の奔流」、つまり渦潮が組み合わされている。江戸時代の鈴木芙蓉や守住貫魚、安藤広重などの真景図もよく見れば静的な風景に動的な潮の流れや渦が描き込まれている。「海面の高さが内海と外洋とで2 m近い落差を生じ、狂おしく逆巻きながら滝状の奔流となる光景」は、静かな風景の中に突然現れる動的なものであるが、静と動ということを考えてみると、例えば日本の伝統文化である相撲、あるいは能も静と動の組み合わせとなっている。そうした観点からさらに考えれば、鳴門の静かな風景の中から急に渦潮という、「滝状の奔流」、ある意味では「滝」が登場することが日本人の美意識に訴えるように思われる。

われわれ日本人が滝の美しさを考える時には、静かな深山に急に現れる糸状の奔流としての滝を、ある程度定型化された滝の風景として考えているだろう。モラエスが神戸三宮の布引の滝や、有馬温泉の鼓が滝を気に入ってしばしば訪れているのも、日本の滝の美しさを理解してのことに他あるまい。また例えば逆に、落語家の桂枝雀がかつてアメリカ公演の際にナイアガラの滝を訪問して見たということが落語の枕にあるが、枝雀は「あんなのは滝じゃない」と言っている。確かに言われてみれば我々日本人にとってはそうであって、ナイアガラの滝は、‘lion’という言葉で表されるような、「見世物」のイメージが強いだろう。滝というものには、日本人の美意識を捉える要素がなくてはならず、美しい滝というものには、古来の定型化された風景が重ねられているようである。

さらには、静かな鳴門の日本的な風景が、モラエスが驚いたように、鳴動を伴って激しい「滝状の奔流」、渦潮に様変わりする様子も特徴的であって、その点も日本人の心性を担っている。静かな風景の中に秘められていたものが、激流として、滝として現れるということでは、静と動に加えて、表と裏のような二重性というものがうかがわれるのであり、こういったところにも日本人の心性の一面が見られるのである。吉川英治の鳴門を舞台とした歴史物の娯楽小説『鳴門秘帖』は、本調査委員会の調査研究報告でも取り上げられているが、それには隠密というのが登場する。隠密は、普段は普通の人の格好をして他の人々と変わらぬ生活を送っているが、特別な任務を帯びていざというときには変貌する。『水戸黄門』とか『遠山の金さん』なども娯楽物として非常に人気があるけれども、こういうものを好む国民性と、鳴門の静かな風景の中に突如現れる荒々しい逆巻く渦潮というものは、決して無関係とはいえないだろうし、物語の創作においては、目に見えぬ陰謀や秘密を含んだストーリーの展開を構築する上では、大きな刺激となり創作の意欲をかきたてるものと考えてよい。

また、風景には見立てということ、代償ということが伴うことがある(42)。この「鳴門」という地名、その漢字を眺めると、「鳴」と「門」の漢字には動と静のイメージが込められている。「門」が「戸」でもあることを考えれば、読み方も場合によっては「めいど」とも読めなくもなく、言葉遊びのようにそう考えてみれば、鳴門が竜宮城、理想郷への入り口、あるいは他界や地獄への入り口、そういうイメージも秘めているように思われてくる。こうした見立てや代償ということについては、本調査委員会の調査研究報告でも指摘されていることでもある。

## 7. 結論として

徳島で16年間清貧の隠者のように過ごし、徳島に骨を埋めたモラエスが、鳴門に出かけて「鳴門の渦潮」を見た印象について記述した文章は僅かにすぎない。本来徳島の町の

姿を描き出そうとしたのであるから、周辺にあたる鳴門のことについての文章が少ないのは当然であるが、モラエスの短い記述からうかがえるものは実は極めて大きいものであることがわかった。モラエスがひとりの外国人として風景をどのように見ていたかを、長崎、瀬戸内海、徳島、そして鳴門と、そのまなざしに沿って辿ってみると、西洋人としての風景に対する審美観に基づきつつも、その先入観を極力退けて、日本人の心性を理解しようとする態度から眺めた「鳴門の渦潮」を含む鳴門の風景を、「自然の美の極致」、「見事に日本的な風景」であるとしたのは、後に鳴門周辺が国立公園に含まれたことを考えれば、実に慧眼による記述であったと見なしてよいであろう。風景の美を理解し、その本質を捉えるのに多くの言葉を必要としないのである。同時に、身近に日々眺めている人々にとってはその風景は日常の風景であり、そこに「自然の美の極致」、「見事に日本的な風景」を、モラエスのような言葉や文化を異にする外国人の目によって再発見されることは、まさに「渦潮」という「滝状の奔流」を秘密のごとく秘めて、瀬戸内海の風景、景観の一部を成している、鳴門海峡の静かで穏やかな風景が持っている普遍的な魅力の再発見と確認であるといえるだろう。

## 注

- (1) 風景と景観の違いについては、風景が主観的で審美性の価値観が込められているのに対し、景観は地理学での用語でもあり、より客観的普遍的な意味合いが強い。荒山正彦「第2章 近代日本における風景論の系譜」松原隆一郎、荒山正彦、佐藤健二、若林幹夫、安彦一恵『〈景観〉を再考する』(東京：青弓社、青弓社ライブラリー 33、2004年)、pp. 82-83 参照。
- (2) 岡村多希子『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官の生涯—』(東京：彩流社、2000年)、p. 92。
- (3) 前掲書、pp. 247-248。
- (4) 宮崎隆義「モラエスの夢—葡萄牙国領事モラエスと第五回内国勸業博覧会—」『東京府のマボロシ』(東京：社会評論社、2014年) 参照。
- (5) 吉田光邦『万国博覧会 科学文明史的に』(東京：NHK ブックス 106、昭和 45 年) 第二章、並びに富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』(東京：青土社、1995年) 参照。
- (6) モラエス、岡村多希子訳『徳島の盆踊り』(徳島：徳島県立図書館、ことのは文庫、2010年)、p. 71。
- (7) 『徳島の盆踊り』、p. 22。
- (8) 『徳島の盆踊り』、p. 59。
- (9) 『徳島の盆踊り』、pp. 70-71。

- (10) 『徳島の盆踊り』、pp. 59-60。
- (11) 『徳島の盆踊り』、pp. 60-61。
- (12) 『徳島の盆踊り』、p. 61。
- (13) 『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官の生涯—』、p. 92。
- (14) 『徳島の盆踊り』、p. 71。
- (15) 徳島県立図書館刊、1995(平成7)年。
- (16) 荒山正彦「第2章 近代日本における風景論の系譜」、松原隆一郎、荒山正彦、佐藤健二、若林幹夫、安彦一恵『〈景観〉を再考する』(東京：青弓社、青弓社ライブラリー33、2004年)、pp. 86-87。
- (17) 花野富蔵『定本モラエス全集I』(集英社、1969(昭和44)年)、pp. 105-106。
- (18) 中川理「第2章 風景の発見」『風景学—風景と景観をめぐる歴史と現在—』(東京：共立出版、造詣ライブラリー06、2008年)。
- (19) 『徳島の盆踊り』、pp. 187-188。
- (20) 『徳島の盆踊り』、p. 59。
- (21) 『徳島の盆踊り』、pp. 59-60。
- (22) 『徳島の盆踊り』、pp. 60-61。
- (23) 『徳島の盆踊り』、p. 64。
- (24) 宮崎隆義「モラエスの庭(3)—異邦人のまなざし—『徳島大学地域科学研究』(徳島大学総合科学部、2013年)第3巻、pp. 143-150 参照。
- (25) 岡村多希子『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官の生涯—』、p. 233 参照。
- (26) 花野富蔵『定本モラエス全集I』、p. 104。
- (27) 『徳島の盆踊り』、p. 63。
- (28) Wenceslau José de Sousa Moraes, *O “Bon-odori, em Tokushima (Caderno de impressões íntimas)* PORTO: LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916, p.53.
- (29) 中川理「第2章 風景の発見」『風景学—風景と景観をめぐる歴史と現在—』、pp. 24-25。
- (30) 田邊幹「メディアとしての絵葉書」『新潟県立歴史博物館紀要』第3号、2002年、pp. 73-83 参照。並びに、佐藤征弥他「モラエスの三つの絵葉書書簡集」『徳島大学地域科学研究』第3巻、2013年、pp. 128-139 参照。なお、以降このセクションの論考は拙論「モラエスの庭—(6)モラエスの目：徳島の風景—」『徳島大学地域科学研究』(徳島大学総合科学部、2016年)第6巻と一部重複していることをお断りしておく。
- (31) 林啓介『「美しい日本」に殉じたポルトガル人』(角川選書、1997(平成9)年)、pp. 183-193 参照。



- (32) カロタイプ、ダゲレオタイプが、それぞれ 1835 年、1837 年に英仏海峡を挟んで発明されている。富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』（東京：青土社、1995 年）、p. 106 参照。
- (33) 前掲書、pp. 14-23 参照。
- (34) 前掲書、pp. 106-107 参照。
- (35) 佐藤征弥（徳島大学）、宮崎隆義が 2015 年 3 月 8 日ご自宅を訪問した際にお聞きした。
- (36) *Permanências e Errâncias no Japão* (Lisbon: Fundação Oriente, 2004).
- (37) 佐藤征弥他「モラエスの三つの絵葉書書簡集」『地域科学研究』第 3 巻、pp. 132-133 参照。
- (38) 『徳島の盆踊り』、pp. 268-269。
- (39) *O “Bon-odori, em Tokushima*, pp. 295-296.
- (40) <http://www015.upp.so-net.ne.jp/h-hayashi/D-26.pdf>
- (41) 佃實夫『わがモラエス伝』（東京：河出書房新社、1966(昭和 41)年)、p. 244。
- (42) 中川理「第二節 代償風景としての日本庭園」『風景学 風景と景観をめぐる歴史と現在』（東京：共立出版、2008 年）参照。

## 参考文献

- ヴェンセスラウ・デ・モラエス 岡村多希子訳 2010 『徳島の盆踊り』 徳島県立文学書道館（ことのは文庫）
- 岡村多希子 2000 『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』 彩流社
- 紀貫之 1988 『土佐日記 貫之集』 新潮社（新潮日本古典集成）
- 佐藤征弥他 2013 「モラエスの三つの絵葉書書簡集」『徳島大学地域科学研究』第 3 巻
- 田邊幹 2002 「メディアとしての絵葉書」『新潟県立歴史博物館紀要』第 3 号
- 佃實夫 1966(昭和 41) 『わがモラエス伝』 河出書房新社
- 富山太佳夫 1995 『ダーウィンの世紀末』 青土社
- 徳島県立図書館 1995(平成 7) 『モラエス案内（増補再版）』
- 中川理 2008 「第二節 代償風景としての日本庭園」『風景学 風景と景観をめぐる歴史と現在』 共立出版
- 花野富蔵 1969 『定本モラエス全集 I』 集英社
- 林啓介 1997(平成 9) 『「美しい日本」に殉じたポルトガル人』 角川選書
- 松原隆一郎、荒山正彦、佐藤健二、若林幹夫、安彦一恵 2004 『〈景観〉を再考する』 青弓社（青弓社ライブラリー 33）

宮崎隆義 2014 「モラエスの夢—葡萄牙国領事モラエスと第五回内国勸業博覧会—」『東京府のマボロシ』 社会評論社

吉田光邦 1970 (昭和 45) 『万国博覧会 科学文明史的に』 NHK ブックス 106

Fundação Oriente 2004 *Permanências e Errâncias no Japão*

Moraes, Wenceslau José de Sousa 1916 *O “Bon-odori,, em Tokushima (Caderno de impressões intimas)* LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ

(徳島大学)